枝うちそへて松のちよさそやまあるんやへよ沼うえ梅うえ

左心こそ案ともにおもへくみて侍つの梅乃

匂ひをちらさてそ松の緑をおくりんことを

二番

めつらしく風こそ人のたよりやも右まつのちよそそ

まねんとやまくみるうへ八重ふきらとやく

一番

いろそうあかうちにきて侍八千怪敷のつ

ちよのあまいのまそともそそ

色てやいとそ松こふそてそ人まい

ふたらとそや伯とそ

いつさ風りよも左八心朝めつまし侍ち勝し

三番

左勝

季経卿

ちさそそ松しまつまそ梅色ようひよ

右

法中務卿

ろうひ梅のあるはふくふや松せりつ春乃的ま

左まつのようひ梅のまそ

そよ風ありま風情よ侍者まいくく

めつらしく侍つの右歌まつ風のむ梁ま

つのまうんとも

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

[illegible]
[illegible]
[illegible]

二番

左　勝

題家朝臣

なつそてそめし松の緑とつめてさけ梅そえ

右

兼宗朝臣

梅のそれそこれかうそ白ひなのそう

古初つし菅家集集うるて侍りや

三番

引きみるものの人乃雨はやとめてもらひきて白

もかさうらみいの色も秋のとそうひねう

[illegible]
[illegible]
[illegible]

又番

左

隆保朝臣

春ふかき高きみゆき白雪のふりにまりもるしなのそれ

右　勝

隆親朝臣

松つくし梅のよそめもあしき神のえ

花ちらぬ侍みちもくのそその松ひとも

六番

左　お

松風も音こそ寒き秋の夜の月もさやけき嵯峨の山里

右

松風もおとこそ寒き秋の夜の月もさやけき嵯峨の山里

左今松風もおとこそ寒き秋の夜の月もさやけき嵯峨の山里

事歌ては君をまつ虫の音にたてて心をわびぬる哉

山のまの月こそ風の秋なれや雲をはらひて侍つ夜半

ちりぬれば跡なき雪のみ吉野の山のまの月こそ風の秋なれや雲をはらひて侍つ夜半

まのまつよもすがらふりつもる雪をやきて酒のむ

おもひやれ雪ふりつもる山ざとの柴の庵の冬の夜

すさまじき心ぞまさるねへ一勝

六番

左　お

松風も音こそ寒き秋の夜の月もさやけき嵯峨の山里

右

松風もおとこそ寒き秋の夜の月もさやけき嵯峨の山里

左今松風もおとこそ寒き秋の夜の月もさやけき嵯峨の山里

事歌ては君をまつ虫の音にたてて心をわびぬる哉

山のまの月こそ風の秋なれや雲をはらひて侍つ夜半

ちりぬれば跡なき雪のみ吉野の山のまの月こそ風の秋なれや雲をはらひて侍つ夜半

まのまつよもすがらふりつもる雪をやきて酒のむ

おもひやれ雪ふりつもる山ざとの柴の庵の冬の夜

すさまじき心ぞまさるねへ一勝

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

侍従ときこえしころ松風もことそよそよかと侍も松風の琴にふきそふるやかさけぬくとまいれるやう（き

七番

左　伊勢朝臣

咲匂ふらむ梅の匂ひふるさとの松のしるへもたよりなるかな

右勝　光行

松ならぬ木ゝの梅の匂ひをもたよりとしるき春の山かな

左　たゝしもとくみよ侍ふん秋とまてるもうくや侍ふん

まさめもり相撲部領もそとりみちにとゝのふる事共ありて文字こしの人もまゐりあつまれる折ふしよめる

事ゝや右歌

もゝくまの公こゝろ

ようて侍ふ事まの梅のうせのそよそよ

松ならぬ松のもとをそとりむすひてお安き

侍ふ左小弁白

つまて右勝侍（ふ

八番

左　勝　　有安

枝うつす梅のうつりもしるきまでいとゞ匂ひを春風ぞふく

右　　宗因

うぐひすの羽風とすなる梅の枝にうつるも花の匂ひなるべし

右歌優にて同じ後のうつるも花の匂ひなるべし

心字雨風とつゞきたるを思ひ寄ぬるやうなれども

うつすといひうつるといひ梅の匂ひのうつりやすきを

もてあそぶ心ばへはいとゞ深くうつるといひ

きたる後の侍りけるにや

うつるといひうつりやすきといひ梅の匂ひのうつりやすきを

並に雨風とつゞきたるを思ひ寄ぬるやうなれども

うつすといひうつるといひ梅の匂ひのうつりやすきを

もてあそぶ心ばへはいとゞ深くうつるといひ

きたる後の侍りけるにや

九番

左　　散位季定

うぐひすの羽風とすなる梅の枝にうつるも花の匂ひなるべし

右　勝　　成金

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

枝うつす秋の
ふかひと思ふ
ともそこに
あやめうつくしき松のうせ
よの面着そめよ枝うつす
ひとをまつ
松風の匂ひよせくる
おかの
そこともありひろくなく
おもふこと
きりみくやすきこと
しばゝ〳〵きりやをいたす
やうにんとそ
そこのまほゆくかな
あやめうつくしき恩
や待つんとそ
十番
左勝
長明
枝うつす秋の匂ひてそつゝむ松の風
右
侍従
あやめとき松のかのをとゝめもみの面もつ松のうせ
右歌ころもこと
ひまさらにさまく
道海の
雪梅の秋
ゆく恩ひのこせ
侍道海

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

十一番

左

右勝

伸頼

十二番

左勝　　公家

松風しきみのほしきを松ならば梅のさかりを

右　　少弥安性

ありこそと紅てさく梅なれどすてゝ

を歌よりくこゝを貴く侍ぬ」と申

はるかぜのこゝろなどくるゝとてあらそひ

ことをさわく俗なり右歌もあめつちの

こゝろをうるはしくよみてあるを

あめ色ともに関えぬ

はつせくことさまに来ぬる

めるわさもろともすれ

あまは右勝侍へ

十三番

左　　康宗

もゝ色なるこのみ

右　　清重

花なるこの本思ふ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

十四番

左　　光成

枕うへに雪のもるこそ梅のかもとをしへ、あるじを、

右勝　　晃親

ひえうへにふりつむ雪をはらひこそ松の花さくこともみめ

を歌を金葉集より松間雪といふ歌ふこの

もろ〳〵のうたの句〳〵さくらかな松さくらうたふ

まりのもろ〳〵よめる歌のこと我侍まも

右いとよろしくはべるべし作者ともに勝とや一

十五番

左勝　　信

みまくほりうへし梅のおりおりに松のもとにて

右　　詠歌性延

酒やらをまつに雪こそみしほどやうやう

右歌もをのづからなる井に生のみどり

のえだ〳〵にねんまき心ゆくまで

め侍るまへるべきやうまへるべきや

うの作勢沈なしみのこと松とうき

面みな右歌もきおもてやらを松のめさとは

へるもみぢのあるべきなくみと

よめる人数ゆきふりあくるまでこもりゐて
雪を梅とみるほどにうぐひすの
きてなくねをぞ梅が枝にまつ

十六番

左

ゆきふかきやまかつの家の梅の花
さかりをまつは春の心か

右持

さかりまつ梅のまもなく雪ふれば
ゆきをぞ花とながめつるかな

右歌よろしくこそ侍らめ

前参議雅経

権大納言公衡

ゆきふかきやまかつの家の梅の花
さかりをまつは春の心か

右持

さかりまつ梅のまもなく雪ふれば
ゆきをぞ花とながめつるかな

右歌よろしくこそ侍らめ

前参議雅経

権大納言公衡

一番　寄祝言恋

左持

兼光卿

契ありてかよふこころもかたらひの
ゆくすゑまでもたえじとぞ思

右

顕昭

ちぎりをもたえじとぞ思ふ我ゆゑに
ゆくすゑまでもかよふこころを

右歌ことに艶にして侍れば

二番

ある古歌を思ひ出でゝ千里の
まつあるかおもひくまつ待
そのまゝおのがまつまつ
あるとかいへるもとのこゝ
まちしてとうの事あ
めもさいあるまとえひ
ハへるり心あり

二番

右　　季経

とうあるを私ともるまとのひ

右　　法印静賢

宗乃うへの松共よりもひさくもろうかね
右衛門佐ちよふもろうまつ
ふるまくとうなるまくとう
おもひてとめるまと右の雑しあまいとも
まつもあひよりもひとうもろうん
やはとうまとひてねる事ろうかん
ふうあるまとて侍
て清さてのまとしまとうまとう
そまとうまとうまとうまとう

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

うひまうでつかへまつ

十二番

左

顕家朝臣

あづまぢといはやまぢをふみわけて

右勝

篤房朝臣

いくへのきりをへだてきぬらん

左歌、かすがのゝ雪のしたくさ春くれば

いろづくまでもみえぬなりけり

右歌、ふるさとの花のさかりはいつしかと

たのめのかぜをまつぞすくなき

左勝、雪のしたくさ、いろづくまでもみえぬなりけり、

右歌、ふるさとの花のさかりはいつしかと

たのめのかぜをまつぞすくなき

しるしるものゝこゝろ姫ことばは

さもこそ〳〵あまたの心みえわたり

なをしさ勝ることはみえざるうち

しもやゝ左のねへりあり

十三番

左勝

隆保朝臣

春とへどこたへもせぬ山ざとの

雪のしたくさいかゞみるらん

右

隆親

雪のしたくさ、初かちに、とゞめをさゝれたるこゝちして、

左の歌もあはれにきこえ侍れど、

よせてぬきうち

あつくこを侍ふ

うめがこいの庵

四地しばん仰先為勝

六番

左

我君のみよのうとそ綿まとちつまくにもそ思

右勝

ちよ万こせあくまでのる式あひやすらんなま

左歌二番共古歌乃やうやわらかのちやせ

こう我、なる面ほしもとも乃ちつとも

きぬれもそ浦代のうてて侍ふ

きまふかもまてせ

しふあらしら月

きるふうきあ

やうく侍らん右

心もさもと思ふ可勝侍を

七番

左

伊経朝臣

君の世をいわうふるまでまさこ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

光行

まことやうちとやへ
八番
左　有安
あさましきまでのよるくさくもなきまで袖のあるな
右勝　宗園
ゆもとうは水もうるみまさるめうしあさ色の事とくるや
右奇もあいぬけまでの色ねをとうつ
まりていつもひとの楽とも申まくや
久しき契ともいひあはで物うらみし侍
為へき右歌いまうめ顕乃心ようる為の為

九番
勝
左　季定
春ごとあしみくなるかへさいなと
右　成全
おとこ山まつもうて伝ものきさもと清ひさくく重ねと思へ
右まことうもの世ふあまんと侍心也孫よ
あとむしてまて久しき契ともいふ右歌おて
こ山松もうくめうとよまするまてそるへ男とま
ほまや古今よとさのことはそよみくく侍めま

十番

左勝　長明

秋きてふ事のまがきの小笹原
そよめく風の露ぞこぼるる

右

待従

まがきの笹の露に波うつ秋風
左歌顕ことばもよろしく侍れど
右歌は秋風の露ばかりをよめる
ことばにて秋の哀れ
いまだ見えず
よりて勝とす

ときこえしうそもみつもの男や
ようあくらもと思くしもの
あまとれもひろいもさもと
しのめかまもよ先つ色と思ふ乃
歌もおもそまつよもやと
女乃うをにるものくよむ
まことやうをのことなま
ものそおもとのう
もよせたるもやそくんん
とうみあい七世孫よ
右内侍

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

らくいまの歌よみ侍ども氏ぶりしたるよみ侍ども氏ぶりしたるこゝろ我ひとりこゝろえ侍ぬひとやうにこゝろえ侍ぬりをたてまつるかたくいさゝかこゝろえ侍ぬ

十一番

左勝

百代もちよせおもしろきさまも侍ぬ

右

くらくいさゝかこゝろえ侍ぬやあやしき

仲秋

左

も歌さまくいさゝかこゝろえ侍ぬり右ふかきこゝろ侍ぬやうにも侍めりとてなをふかくいさゝかこゝろえ侍ぬやうにもよみ侍ぬといふ歌は近頃きこえ侍ぬ寄祝

左とりふ題もとくもふかくいさゝかこゝろえ侍ぬやうにもよみ侍ぬといふ歌は近頃きこえ侍ぬ寄祝

十二番

左勝

公条

侍ぬりは同心にこゝろえ侍ぬやうにもよみ侍ぬといふ歌は近頃きこえ侍ぬ寄祝

右

遠みよりち千年もとくひさしかるへき松のけしきや

安性

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

[illegible]衣のまゝとりかけてふせ給ふを人〻もの迷
[illegible]右歌ともさゝて侍るを右歌と君つよく失
[illegible]のとりもまゝもとりさてかけとゝもつゝぬこと
[illegible]ほかへなんといふ歌を恩もれたるや見い
[illegible]梵天いふ朱衣掛畫に十畳盤石為一劫
[illegible]といふ經教とをめたまふ後に短文うりを
[illegible]おりひく侍まてゝかなはぬそといふて
[illegible]祝言よめるとかの祝宮と思ひたまいさゝ
[illegible]伯めへ〻あり〻霓裳羽衣といふとも伶
[illegible]まて天人のをとゝもうるよ

てい〻ふ〻ゝ我〻同ゆゝかの名をふるゝ
[illegible]事也いふ句なり右歌
[illegible]

十二番

左勝　　廉宗

[illegible]ゝ春のあ〻ゝ多ゝまゝに降ゝ
[illegible]

右　　清重

[illegible]ゝ春ゝ降ゝ[illegible]
右歌百葉集にもとりさゝ
いまゝ〻ゝ物とあるものゝさを
めとの公任卿も世ゝもてはやし名を

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

おもひくいさせ申まじく候
右候ハゝ諸事ニ付
うらも諸なく候事
人もおほくおほくみつかいとも
侍さなき事ニ候
なの先可勝歟
右

十七番

先　特　光成

ふよりもあひみぬ事かねてふかく
侍ニさなきまの事ニ候
右　覚悟

ゑみくいちこせのちかひのふかく
先の番ニ
中ときて
きこのもち持ち

十八番

先　佐

あく事のちこせとへ
右　勝　姓歟

名代のまあくちさ
右心もちまみ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

[illegible]

十六番

左勝　尾張

[illegible]

右

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

民部卿家歌合　建久六年三月廿九日

題

山花　初郭公　暁月　添雪

歌人

左

権中納言兼民部卿藤原朝臣経房卿　勝二持二負一

権中納言平親宗卿　勝三負二

権中納言藤原光雅卿　勝一持二負二

左衛門督藤原朝臣隆房卿　勝三持一負一

参議左近衛権中将藤原朝臣公時卿　勝二持一負二

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

參議右近衛權中將藤原朝臣繼
正二位藤原季能卿　兼右京大夫
從二位藤原季經卿　前宮內卿
從二位藤原經家卿
右京大夫藤原顯家朝臣
尤近衛權中將藤原兼宗朝臣
右京大夫藤原隆保朝臣
右中弁藤原定經朝臣
散位藤原有家朝臣
散位源定宗朝臣

勝二持一員
勝一指二員一
勝一持二員一
勝二持一員二
勝二持一員三
勝二指二員一
勝二持二員一
勝三指一員一
勝二員三
勝三指一員一

權右中弁藤原宗隆朝臣
治部少輔藤原為季
中務大輔藤原保季
攝津守源長俊
片岳祢宣如我重政
沙弥性照
興福寺權別當法印範玄
皇太后宮大夫入道釋阿

右

殿富門院大輔

勝二持一員二
勝一指二員一
勝二持一員二
勝二指一員二
勝一持一員三
勝二持一員二
勝二指一員二
勝一持二員二

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

沙汰生蓮 阿光
中宮讃岐
二條院三河内侍
國白家丹波
右近衛權少將藤原成家朝臣
右衛門權佐藤原朝経
僧祐盛
皃通来格少將藤原定家朝臣

勝二員二
勝二持二員一
勝一持一員三
勝一持二員二
勝二持一員二
勝一持二員二
勝二持一員二
勝一持二員二
勝一持二員二
勝一持一員三
勝二持一員二
勝一持三員二
勝三員二
勝一持一員三
勝二持一員二
勝一持三員一
勝二持一員二
勝二持一員二
勝一持三員一
勝二持一員二

散位藤原仲綱
左衛門權佐藤原朝経
前越中守藤原家隆
皇太后宮亮藤原有経
左少辨藤原資實
前播磨守藤原隆親
侍從藤原實宣
僧靜縁
前大和守源光行
沙弥見佛

右衛権佐藤原隆徳朝臣
少納言法印静賢

判者

皇太后宮大夫入道従二位
勝二特一員二
勝一参勝員一

一番　山花

左勝　民部卿経房

春ごとに名のみ聞きわたる山
やまの桜をけふぞたづぬる

右

殿富門院大輔

やまの桜をけふぞたづぬる
古歌ども朝ぼらけ
よもぎをみても心ぼそ
海なる事かまでて
まことに風のうへに用の
なべて

二番

左　勝

持中納言親宗

ふる山ざとの朝日かげ　橋つかさ

右

冰消生遶

ふる山ざとの朝日かげ　春氏のもと

兵衛督世のなかもとどけ　いとゞ心を

うるおひて　古院乃御時人おほく

をりをりにつけ　勝ハ先例なり

三番

左　勝

左衛門督隆房

いはのまゝ老の白雪積るとも　ふるきみやこに

右　勝

中宮讃岐

ゆきうもれたるあとのにごりて　なほ雪深き

左歌ふるきみやこに

用ゐ雪はるゝともおもひくに　侍ると感て

ふるさとにうき人風の不吹とも　ゆきもる窓

判者

左　勝

持中納言兼光

春日ちる二月の月梅まれて
　右　二條院三河内侍
ゑめまはのにほふ山ぢのうぐひすは
　ぶんぢの尚歯會をもとめよ
二番　又
　右
春をみよ風のやどの梅の花
　ちるとやいはん雪とやいはん
　右勝　関白家丹後
もろともにをりつくしてやちるとのみ
　春ぶんぢの尚歯會
　右
き秋風にわかれきぬと見ゆり但ちり乃
山ぢもあれ花のゐもあれ古歌も今もおなじく侍
　右為勝
六番
　き勝　参議公継
花見へく春の山ぢもふきまきてまつ吹ぬ間の我ゐほり
　右　右道助将成家
ふるさとも雲居もおなじ春と思ふ
　先我後ふる郷心ぞ
みち侍り左勝と申すべく侍

七番

左勝

雲風も梢ハそよまで吉野山
　ふもとの園梨花白

右

白雲に雨ふるかとハ山さとの
　めもる人ハ優なるけ来白
　雪勝ちまさりも

八番

左持　　従三位季経

さうぬまハ霞かとみるに白雲にはるる雨ふる山さとの松

右

沙汰の限ハ絵ならねとも

雪ほそ入る雲風のほどまでもあらハれ侍ぬ白雲と雪をわかつふるさとハ雨ふるとハ聞ねとも

つゝまやうにいさとりて侍るに右ハ

ゆきもらんかと見ゆる迄くれなゐの葉ハを

しら雪とまがふるまで侍るに但左ハ

花と梅とを雨雪よりきたる山と云に

とゝふ人ハ雨雪ふるとも雪ハ降ましと侍ぬるや

九番

左勝　松　従三位経家

みよしのゝさくらの山もさきぬれや
雪ふりしきる花の白波

右　詞　船遊興也

三国ヽ尾上のさくら咲ぬれや
雪ふりしきる花の白波

みよしのゝ山の花さくころほひ
雪ふりしきる春の白波

つゝさきて匂ふ梅の花ならば
雪ふりしきる春の白波

十番

左勝　左京大夫顕家

あさのつゝそでのみ人のみをつくし
なみよりおくの名をやみるらむ

右　僧社盛

もゝ年をつゝみなく春の白波は
名をや匂ふの山ほとゝぎす

左舞優よく仕まつれり右歌当座ともおぼえず
をや匂ふの山ほとゝぎす

海ならずやまのうちも侍りけり

十一番

左　将監宗

新千
白雲にわけそめてこそ山桜
花よりほかの色をみねとも

右　　左近の将定家
右野山家代歌をもとめ桜もとれる歌合をもとに
　　右勝句おもしろくみゆる持とよみ侍る右
　　あるじ持とよみ侍る右

十二番

右　　右衆未更降係
こゝろあるとこゝろまてこゝろのふかきやうとみえん
右勝　　散位伊綱
遠とをちかたみるくらもをかしきの夜半の月をそ
き歌と人は幽閑の賢者と侍るもことわり

むとこゝろ右歌もと婦心あるやうとも衣笠院
事歟よやこゝろ侍るとこゝろ花の色を
みむとをめさるとも侍るとなんおぼえまさる
左

十三番

右　　右中弁宣経
旅枕ねの夢路をかよふらんと侍るは
桜もれ月をけてそ入ぬるとこのもかの世もしたふ

心路を誰か留めしとゝはゞ
待とはゞ

十四番

左　　散位有家

朝まだき起出るよりあら玉の
春立つ日こそ人も待ちけれ

右　権　　前越前守家隆

よろづ代をかねてしめおく春なれば
花霞めるけしきなるらん

左歌いとゝ艶にて神さびたる姿の美風
花霞よりもなほ艶にて神さびたる姿の美風
という事なし左の下句奥ゆかしき風情
なり宜しく案情の通とするや

侍ら袖うちふるまでもなけれども
ふるもうれしき春の雨かな

十五番

左勝　　散位定宗

よろづ代の朝ぼらけのそらにかすめる霞や勝ちぬらん

右　　皇太后宮亮有経

春毎にかはらぬ秋の月をのみ君が心に思ひ出でまし

左歌艶にやさしき文字やうにて中〳〵
風情ありて秋の歌となみ〳〵ならず又末
句ちうもや待ちぬ共ともとうるほひ

侍従

十六番

左

勝

とよのあかりのよるのにはにたちまふをとめのすがたはるかすみのうちにみゆ

右

ふるきよりいまにつたはるまひのてぶりはおなじくもをかすみのうちにみゆ

とよのあかりのよるのにはにたちまふをとめのすがたはるかすみのうちにみゆ

右衛門督兼権中納言弁宗経

とよのあかりのよるのにはにたちまふをとめのすがたはるかすみのうちにみゆ

ふるきよりいまにつたはるまひのてぶりはおなじくもをかすみのうちにみゆ

とよのあかりのよるのにはにたちまふをとめのすがたはるかすみのうちにみゆ

右衛門督兼権中納言弁宗経

左

侍従

治部少輔為季

春風のふきもとかすもみよしのの花のしらゆきふりやまさるらん

右

春風のふきもとかすもみよしのの花のしらゆきふりやまさるらん

兼権中納言隆親

白ゆきのふりやまさるとみよしのの花のしらゆきふりやまさるらん

春風のふきもとかすもみよしのの花のしらゆきふりやまさるらん

兼権中納言隆親

左

侍従

治部少輔為季

春風のふきもとかすもみよしのの花のしらゆきふりやまさるらん

右

春風のふきもとかすもみよしのの花のしらゆきふりやまさるらん

兼権中納言隆親

白ゆきのふりやまさるとみよしのの花のしらゆきふりやまさるらん

春風のふきもとかすもみよしのの花のしらゆきふりやまさるらん

兼権中納言隆親

持

花ゆゑにこころをそめしみよしのの山のはるかぜいかがうらみん

右

花ゆゑにこころをそめしみよしのの山のはるかぜいかがうらみん

中納言兼輔保季

花ゆゑにこころをそめしみよしのの山のはるかぜいかがうらみん

花ゆゑにこころをそめしみよしのの山のはるかぜいかがうらみん

中納言兼輔保季

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

右勝　侍従實宣

常盤木こそ雪の内の梢なりけれ

左　忘れ初めてもなくに秋の葉の

いろ色変はりゆくや待つらん

十九番

持　權律師長俊

よしの山花や園生のおくれじや

木の下ごとの雪のむら消

右勝　侍従靜緣

高砂の松の梢に風吹きて

右寄松祝歌の法門しくに思ひやまと俗と

右の歌尾上松をよめる事と雖も

皆しく侍ると雖も

まこと古歌ども多くあれば

此ほのぐ之勝負や

二十番

先　行基法眼宣政

右松を緑の梢よの為よろひよろう

右勝　前大和守光行

よろの山花のもとをまひとりやそ南

左おもふこと
[illegible]
[illegible]
へ
[illegible]

廿一番

二十 左勝

沙弥性照

[illegible]

右

沙弥円弁

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

廿二番

左勝

興福寺権別當法印範玄

[illegible]
[illegible]

右

右京権大夫隆信

[illegible]
[illegible]
[illegible]

一番　初郭公

左　民部卿

待きるとあまた心やうつり初るきぬ〻の秋

右勝　大輔

時鳥なく〳〵初音ふりすてゝかへるかたの山ふかみ

あまの住る初めもそらにしられけり月ふく風の通路

左　古風通俗歟お更あまの住る初めもそらにしられけり

うたもきこえ侍れと編さる事

の秋ふくと風の吹ても

二番

左勝　年中納言

あこ丸の初音きゝつと時鳥待つる程

右　生蓮

ほとゝきすなくそらそなる親も哉

左歌ふるめかしく侍れとみやひたる所

待つる程の歌事理あり

聞る朝の庭もまた

まちつるとはいふかたもあるへし

三番

左将
いうこゝろは
左
ほとゝきすいまこゝもとなくなるこゑをきゝて
左和
ほとゝきすいまこゝもとなくなるこゑをきゝて
侍従
ほとゝきすいまこゝもとなくなるこゑをきゝて
ふみもみぬ人のこゝろやとゝきすの
とゝ待つるこゑのいまもなくらん

左馬頭
藤中納言

母親
左
ほとゝきすいまこゝもとなくなるこゑをきゝて

左馬頭
古賜
侍従
左
ほとゝきすいまこゝもとなくなるこゑをきゝて
左衛門督
左
ほとゝきすいまこゝもとなくなるこゑをきゝて
左京大夫顕輔
左
ほとゝきすいまこゝもとなくなるこゑをきゝて
皇太后宮大夫俊成
左
ほとゝきすいまこゝもとなくなるこゑをきゝて
左衛門督
左
ほとゝきすいまこゝもとなくなるこゑをきゝて
皇太后宮大夫俊成
左
ほとゝきすいまこゝもとなくなるこゑをきゝて
左京大夫顕輔

おはつるまでは初るうの親方の
南方の附るまで望
方のよふなるのてを
ふるまひ右次上
六番
左勝
新千
弐望下るかるへ郎ほる
右
勝家朝臣
ふるまひ次第
左歌外の初るうの親方の
侍る右の姫もある
うの勝るやうの
七番
左
右京大夫
うのとを受るて附るうの
太鼓
尋常の思へて郎ふ初る
添き受のうれ初る

く風ゆるとも初るなるうぐひす
少ほとく侍ん初音をも
華理ふへるや左の勝と一ツもや

八番

左　前宮内卿

春立くまもよや春の時るほと
右持　寂蓮

行くかまつ人も心もほくきく里の松
を歌初るふかき心しるや
しらいとるふしをとうぐ

もし彼天徳の合歌にまさり申歟よも左ハ
まりやきつるかいなる
歌あくまて久人ふるの里ともの
ゆりや右勝りや侍ん

九番

左　勝

ゆるまの琴てきこんほくきゝ秋の
右

右大臣法眼

あをやまの人まかそふもみちまきくの色
あなのゆふまの右ハ見てやもしらん右人々

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

十番

右

[illegible]

右勝

[illegible]

十一番

左勝

[illegible]

右

[illegible]

十二番

左持

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1　　ガラス使用

母の姉妹とてふくまでくに同名玄蕃助
右　伊綱
ふるく尋ね人なくなりぬる
左歌上句ある巻きたりて関ものを来とある
事なくや古歌侍るにや巻の歌
やうに見えぬ物なりて持こゝや
十二番
左勝　定綱朝臣
郭公まつ歩をぬ一声まつ
右　朔経

ほとゝぎすの鳴れぬ初音を
あやめ草の親ものゝ優
ゆるをまつの後ね
ゐるまでもまつや待を古郭公
尋てとゝぎすとも
十三番
左　家隆朝臣
ほとゝぎす初音
右　太腹
家隆
郭公まつよりかけて雲路より初音もれ人
古歌夢の称号の報

やいうそのあるものへ
弁論をこゝろみんがため
十五番
左勝
持ちある人なるべきは
右
教ゆる所なきに似たれど
持ちある人なるべきは
未だ
有経
宗綱卿

なる為
十六番
左勝
宗隆朝臣
ほとゝぎす次待つ比の名所
右
資賢
ほとゝぎす初音なつかしの
右歌
義
待つ
歌世間
義実相
待つ
右

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

十七番

左　為季

郭公なくなくすぎぬ夏山のしげみに人を尋ねて

右勝　隆親

きくからにまづ忘られぬ郭公ふかき夜半のこゑの優さ

なかなかに優さもみじ侍らじと千歳の秋を契る心は

持　保季

思ひ入れぬ憂きにつけても時鳥うつるこゑをぞ恨みまし

十八番

左

貫宣

深山木の葉井さらぬ郭公人しれずこそ鳴きわたりけれ

右歌姿おもしろくいひなせるやうもあるにや

左歌ふかき山木の葉井さらぬ郭公人しれずこそ鳴きわたりけれ

右歌姿おもしろくいひなせるやうもあるにや

十九番

左勝　長俊

時鳥人のとがめぬ五月雨は

右　雜録

雜まつりのことなどいふべくもあらず

右の歌ものくみのまつりの

人の心をうしなはせんまつりやそも

右は人とふかき親やきやうだい

しのべくいふまつりまで

ほつきまつりをまつりやも

女蕃

左

清かたのまつりなどいふまのやう

左　勝　　先行

まつりの親ともなまじ初りてまつりあまた

左歌香もちひてかくいふまつり

詞をもちまつりをまつりや

者〳〵右方あまたまつり

いふ物ゝ心なき勝とやまつり

升一番

左持

壮観

ふりのまつりをまつりまつりや

右

見物

[illegible]の花の枝の匂ひをとゞめ[illegible]
あまの[illegible]親たちの[illegible]
[illegible]まる花の枝をとゞめ[illegible]
[illegible]ともにおりかざすべく[illegible]

廿二番

左勝

奥秋の稚別當法下

思ひ[illegible]森[illegible]夏[illegible]きつる初声[illegible]
なほきゝまさるほとゝぎす谷の[illegible]親里のまつのむら[illegible]
[illegible]のゝ[illegible]親に[illegible]

右

[illegible]隆伝朝臣

[illegible]きゝをけるかな[illegible]
[illegible]来の白のんもまつ[illegible]
[illegible]もきゝそをしほさ[illegible]

廿三番

元

[illegible]

[illegible]ゝとゞ[illegible]
[illegible]

一右勝

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

一番　暁月

左勝

民部卿

右

大納言

二番

左

年中納言

右勝

生蓮

雲のうへ人もおもはぬ秋の夜の
ながきの右勝と申ものを宜

三番

左

兎歌門督

秋ふかき暁の羽音こそ降くれ月すめる
空の雁の数をやかぞふる

右勝

讃岐

彩右 おほつかなあきの初音こそ聞すくいまだ誰かは
月の雁の数をもしらん宣侍を

左歌暁の羽音こそ聞すくいまだ誰かは月の雁の数をもしらんと詠
たる心ふかくきこえ侍れど右勝

おほつかなあきの初音こそ聞すくいまだ誰かは月の雁の数をもしらん
と詠たる心ふかくきこえ侍れど右勝

四番

左勝

藤中納言

雁の月のひかりをみやこ人
雁よりも照月影そうすき高度をの八声は秋や新らん

右

三この内の四侍

左歌雁の月のひかりをみやこ人雁よりも照月影そうすき高度をの八声は秋や新らん
と詠たる心ふかくきこえ侍れど右

いにしへのおほつかなき侍ふる時の心よりも
こゝろみにとやうやうきこえ侍れど右

よせらるゝそらみにとやうやうきこえ侍れど右

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

くや

五番

左　　夏扇相中將

をく霧の月の紅葉や海士の尾と兵衛の督きこもかり

右勝　　丹後守按

月もなしをくの山もみぢ葉の色はあやなし晩の景

右詞艶顔淫乱の事もや有らん猶晩の景の字あるの

左詞艶顔淫乱の事もや有らん猶晩の景の字あるの

六番

左勝　　右近衛中將

みくら敷あまの羽衣と思ふ心はたにいもる心地して

侍るへき右勝詞艶顔淫乱の事もや有らん猶晩の景の字あるの

右　　成家朝臣

時もきまらぬ空ながらきりぎりす秋の末葉の露の月

右月もまたるのみならず蟋蟀の声深更に及ぶの中

のみならずまたいまだ秋の末葉の露の月

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

七番

左　持　　前右京亮

八番

左

前宮内卿

右　勝　　筆蓮

勝とこの中ル

九番

左　勝　六條三位

なくなく筆染めやまこ白露も　宗長

右　右大臣法眼

あだ人もとふらふ秋の旅衣　宗碩

左歌かろくやおよすさまじ

いねつゝ夢のおくの社　宗長

手枕の月も優なる侍ふさま

おもしろやいふう侍らん　宗碩

十番

左　顕家朝臣

松風あらき浦と月新て　宗長

右　勝　祐圓

動くとおもふかすかに入相乃鐘　宗碩

左歌やまの端ゆく雲の入ぬるも

と乃音や曉ちかくみゆるらん　宗長

右猶入おのこの色るんよう侍ん

十一番

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1　　ガラス使用

十一　左　　兼宗朝臣

もろともの月のこよひのさやけきハ秋のうき雲はらふ風ふく

右勝　　宣家朝臣

月ハ猶ありあけまちもいとゝしき秋のうき雲はらふ風ふく

あきの月の秋毎にかはらぬ色ながら秋のうき雲はらふ風ふく

やまもとの雨ふる窓心ちして侍とも右勝

ありあけの月ハ猶こそ待ほしけれ秋のうき雲はらふ風ふく

十二番

左持　　隆祐朝臣

秋ふかき夜ふけの月ハ雲井にぞ秋のうき雲はらふ風ふく

右　　仔細

そらもとゝもにすみわたりつゝ秋のうき雲はらふ風ふく

左歌雲井に残る月の影ともいふへく侍や右歌ハ

ありあけの月ハ猶こそ待ほしけれ秋のうき雲はらふ風ふく

なく〳〵も猶こそ待ほしけれ秋のうき雲はらふ風ふく

長月ありあけの月ハ猶こそ待ほしけれ秋のうき雲はらふ風ふく

なく〳〵も猶こそ待ほしけれ秋のうき雲はらふ風ふく

十三番

左　　定経朝臣

雲ねはるかなる月を旅ねの袖にかたしきて秋のうき雲はらふ風ふく

右勝　　朝経

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十四番

左勝

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春ごとの三月を忘り給ふ心にまかせ
花ざかりつゝひさしくみまほしき
うゑもそめつゝ心ひくとせん
いとゞ来の白優なるやうをつゝ
十六番
左 特 宗隆朝臣
深しまは月ものこりなきかげを
右 資賢卿
ものもとゞまらぬ夏や秋のよの
左歌月ものこりなきかげをとりいれ
ぬるかとみゆる山ざとの宿の
ふかんとみゆるまで露ふかき
ようもそえ物ともすゝしく
十七番
花 物 為秀季
みるせはやはるもまちえて浦さひく
右 隆親
なく今朝の羽音にそまき
をゝ寝覚の夜半の

十八番

左　勝　　保季

あくまでそ袖のやうし浅茅生の露
もる月数
右　　實宣
もる月をこゑてもる山地
左歌ふるのやうに橋うたゝ浅茅生の

十九番

左　特　　長俊

三輪の月すてあそこ里ちこ夜のもれふ
入〳〵迄ありさまや古の事も偲ひて
み吉野まて分入月勝ちそへ〳〵

右

静縁

折ちき海まて弁のまさて時〳〵秋そ
まさ石も着きを八雲間の浪のよう月ゆえそめく
あはし右は行業風景は秋の空を感せる

す優なるみくさおふる涙の花行風を恨ひて月
の袖をくちなくやあふんおしとをくや

二十番

左持　重政

雲月をかくせるなかめむ明ぬるかなと
ふるあよふのとち雲

右　光行

松の戸を独ながめむ明ぬるかなと
ふるあよふのとち雲

左歌ふるとことこめよるくいふの雲る来ねおふ
さるりくなるとと上句の雨もふる
ぬるくをよ雨さるねしあるやねし来庭夜や

右歌ふるとことこめよるくいふの雲る来ねおふ
さるりくなるとと上句の雨もふる
ぬるくをよ雨さるねしあるやねし来庭夜や

松そ友めいつ子ふ月のなと深
つれ庭気すくしふ右歌普思い新ふくいふる
老父集代陵園妾を思へ為ふ松門暁
五月郭個ふ心ふ松のつくみふされ
し松のつくりふさ雨よいあふいふ庭
乃松の右の松戸又物ふやてふ

女一番

左　壮照

月ふふるふのふそ女のふ雨ふふ雨ふふ
太腹　見佛

[illegible]ありさまの[illegible]風[illegible]まて[illegible]
[illegible]古歌[illegible]優[illegible]心[illegible]
[illegible]ふんう常の[illegible]
[illegible]
[illegible]

廿二番

古将　　權別[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

右　　隆信朝[illegible]

[illegible]

古歌のさまなどいと[illegible]風体[illegible]
[illegible]社侍[illegible]古[illegible]
[illegible]山[illegible]
[illegible]

廿三番

[illegible]　　[illegible]

[illegible]
[illegible]

古

[illegible]

[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

[illegible]
[illegible]
[illegible]

五番

左勝　藤宰相中将

春霞たつ立ちかくす雪ゆゑに千里も遠き心地こそすれ

右　舟後

雪をのみ花とおもひし吉野山春霞たつ立ちかくす雪ゆゑに千里も遠き心地こそすれ

左右ともに歌の心ことわりきこえてをかしくみゆ

とをなし

六番

左

右近衛権中将

雪ふりつもりて春花もみぢもみえぬ冬ごもりせる松の家朝臣

古勝　成家朝臣

志賀の山越えてぞ見つる紅葉の錦たえてさびしき峯の松風

左歌心姿優にみえて侍るを右歌もその詞よ

路の雪跡なき程まで思ひ入れたる心宜く侍るやう

ばをさることやこの事侍るべし

七番

左勝　前右京大夫

降雪乃袖ふるほどに積もれる心よりつくる冬の景

太　敦昭

雪ゆきてあしの入江に波絶えて清もるる谷にかよふこえ

水雪添ふ人ぞ侍ふ山の奥も幾入

里ともあらぬ八重垣の雪よりやあふ

山右芹つみうゑし波もてなさぬ優女侍

為しかまの匂ひ少なふまで侍ふ姿

下成ぬまに動ふ一体なるゆふて

よ侍ふたのはふくれ詞そうふ共ゆふて

松が花為勝

八番

左持

前宮内卿

尋ふの雪こぬ人も海士舟に波かよふ心の墨

右

我もまた人ぢかき雪のたのその森ぬ心墨

西方ぬ雪窓の朝ふ優女侍ふ春のつ移

雪ぐそ人かの雪にて等ゆふ庭

年浪のまさ八常盤ぬ事ぬや古又人ぬもとぐ舞

名うかきそぬふも雪の朝乃小屋の山里うく

ほこのるよあふ山ぢとほふとも知るし袖

まやそおるそやふ

九番

六条三位

を

落ゆきて人にふまれぬ木の葉つもりてしぐれの
ふるにまかせたる

右勝

古大宮法眼

如雪にまがへてもなほ白妙の山さと
庵をたれかとはまし

右

花上句にあるをもとりてみくさ共にいひなせる
哥やうに聞ゆ右の山里をたれかとはまし云々
哥やうに聞ゆ勝と定む

千番

左勝

躬恒家郎下

まだきのくれぬるかさの後のやど板屋もみぢ
葺雪

右

祐盛

氷室山谷のうもれ木あらはれて春待出る
心地こそすれ

右歌ことばもめづらしく聞ゆれど春待出る心
ばえなる事もなきやうに聞ゆ

十一番

左

基俊

如雪ふりそそぐみ吉野の滝なれば絶ぬ家の業
ぞ積る

右

定家朝臣

ものふすもやもめ住ぬ松の雪

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

十二番

左勝　隆保朝臣

十三番

左勝　定経朝臣

年ふくまつ雪ハさそふ右ハ集物ハうり
めかをめるつ雪ハ降ふ雪ハ行るを
降こへみをふくいこ雪のやうく
や降ふ右当共ハ勝や

十七番

左　有家朝臣

日数ゆく雪踏ふてこそ社人のふさけもゆうとハこゝめ
右勝　家隆
埋ふく松りかくる深山路ハ雪こそ木の
右歌雪山ふ日数ふてハ勝ハ優

ふ降ふ雪ハ歌枕なれ共実朝卿
多雨ふ深をしはゝ心当ふ右
まさりや降ふ

十八番

左勝　宝実朝卿

山ふ検校雪ふ籠ふ山ふまよひふる雪
右　ま経

降雪ハ小田井の山落ふ埋ふこゝ人ふ踪雨ふる
右雪ふ降ふまハる雪ハ優ふふ一右
雨風ふふるまゝのことや右

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1　　ガラス使用

[illegible]

十六番

[illegible]　宗隆朝臣

[illegible]

右勝　資実

素寒き[illegible]

左負人[illegible]

果を思ひやる[illegible]

つひ雪やそのふもとまで[illegible]

かくしてなほ左勝とや[illegible]

十七番

左勝　為季

雪積もる[illegible]

[illegible]

右　隆親

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1　ガラス使用

左　保孝

右勝　寶宣

十九番

左　長俊

右勝　靜緣

二十番

左勝　重政

百年をへて梢千種をかくすらんこそ
宮木ヶ原の心ちすれ

右　光政

左方面の山雪の積よそほひ
うつくしくおもしろく右の松の雪氏の
通路をもらすに宣しからず
いへるこゝろやうはそのこゝろをそれよの
人の常ならずおもしろくて

優なることゝや云の明はれてとをかすむ
もまた面白かるべしそれ雪いかゞあらんとて
なかくにはみゆるものかな遠く後慕法師と
やまのたにはきゝ山の雪とよめるこゝろ
よろしきまさるべくや人のくちおもりにて
なりを時も老僧ゆるされて侍るまゝにて
右勝とすべし

廿一番

左　壮照

春ごとのふもとの煙もみどりこそ雪ふる山のまさる沢

右勝　見侍

陸奥の紅まよりはたる雪に粉をうむ谷うもる

右方の雪のひかりに三月の晩よ雪ふる

〜よう伊勢物語のまゝにまゐりてみる乃

雪はさう壮侍るの但婦のする沢〜くゝてた

〜ようひさ〜とするやうにみえ侍れ若ふまき

のやの紅まりる雪に粉をうつむ紅をもるむ

心宣や侍らん為勝

廿二番

左　権別当法印

夏と春門〜掃雪にうつまてまつ春よりそてさく急ふか

右勝　陰信朝臣

けさみまは粉も庭を紅につてそ雪乃ふる

左右乃粉の雪見ゆ〜ものひと勢みまてを

〜いへるゝ北まて雪のそこちするよう

乃ふ〜宣や関ゆるん右の勝〜ゝや

廿三番

左　皇太后宮大夫入道

ほ乃ゆる掃ふまゝう初陣山雪乃ゆまれてふまの枝

右　廿少納言法印

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1　　ガラス使用

陰雲に宿はさゝうつもれて名も白河のせきもる
白河のせきもれて雪名ゐ物
ゝう侍るめり但依例

一番　久恵

左　持　民部卿

いつもまことの心ともぬゝ
右　大輔

そのやまひの事ふ
右歌心ゆるへ
ゐ納言

二番

左　平中納言

此歌ともせや
右　生蓮

おもひそめんもの
みうするとき
を手ふるやう
もてそやし侍
文字はさまや

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

三番

左 持 左衛門督

恋しきを忘るるまにに折ふしの物とや人も思ふ

左 贊岐

新古 頼めこて濡衣着る袖ならば恨みの長柄の橋もつくらむ

左 この長柄の橋をつくるほどに春歌文談

半頃も待つる身と思ふなよ頼めぬやどの夜の衣の

右 三河内侍

恋しきを忘れぬ袖はかはくまもなし

二番

左勝 藤中納言

長柄の橋のあらばこそ身をば捨てめ

右 三河内侍

実や色にかくる恋ならば

代もかるる色にいでなば

寄みて待つとはかを勝とそ

又番

左勝　藤宰相中将

[illegible]

右　丹後

[illegible]

六番

左勝　右近衛権中将

[illegible]

右

[illegible]

七番

左持　前右京大夫

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

遠うちかく色めく袖のうへまで月をもる

右　　歌仙

うらなべてつきにはあるをなれやさは

右秋さむき葉陰の虫の声ごとに

ひくもちて今宵の秋とみくまの右もて

おりきを物さとのとを面白やみち

度会やあとへて持すへくや

八番

左　勝　　前宮内卿

侘ぬまは月日うかりしきつもよふかき夢と思へし

恨侘なれ年ぬるも袂のみ

左つきもなきふる恋の心みく俗

しらあられ我とはなしに

きもくこるにやあらん

九番

左

渡ゆく舟あら磯をかすかにて

右勝　　右大臣法眼

つまもなきふる恋を毎松そら

右歌柳ある袖をかくへ云ふ事を
おもひあてゝなるべしあるふ常の事なるやうにふ
いまゝ松あるといふ常の事なるやうにふ
まてといふ事とうよりもいふ

十番

や

十番

左持

顕家朝臣

あふ事を命にかくへ云ふ事おまり我かうへ
おもひ入たる歌心をつゝ

右

猶盛

優曇へ云ふ花をおもふ歌もおほ
けれ共いまだ見ず

左命にかくへ云ふ事心ふかくおもひ入たる歌
なれ共右須ゆへあまりふる歌子
慶ふるきにや歌の心ものかすかにおぼえ
侍まて持るにや歌乃数も十五首
もおほからすや侍らんそれ猶
十一番

左勝

兼宗朝臣

悪物くさき中にいとゝ悪物くさき事
右

定家朝臣

とゝのほりたるやうにて姫松梢のせまりたる

左歌ふるき事なれども心ふかくきこえ侍るを
右歌まことの風情ふかくよろしくきこえてこそ
よろしくきこえ侍るめれ
かちこの事に

十二番

左　勝　　隆保朝臣

あふくまの峯松のあらしの音ばかりこそ清けき
右　　伊綱

うつせみのよをいとふ山ぢのかせしげみ
右歌の事ばの優なるこそ侍るめれ

十三番

左　勝　　定経朝臣

我宿のいくむらすゝきほにいでゝ秋風ふけば露ぞこぼるゝ
右　　朝経

おけばこそあるもかなしき草の葉は露なき世にもまさらざりけり
右歌心ばへもことばの続きも果は歎かるゝ世にまさらざりけりとよみ侍るこそ
ほどとおもふにやさしくや侍らん

十四番

左勝

有家朝臣

ふるさとの百敷の秋の夜の月

太

家隆

独詠のみなもとまことや深みてし我が袖の露

左歌ことさら侍るべくや侍らん

うちくもりはれぬ涙を侍りつるやうに覚え侍るを

いかが左のもちのうまれ侍らんや侍らん

十五番

左勝

定家朝臣

行くすゑのものうきみるめ浦ふけてあまの松ぞと

右

生経

法華経の年月の積りは高やうまされ侍るを

右歌なりともさもみえてなびかぬ心頃にて侍るを右歌高やうまされ

とみえ優にて侍るにや猶のことやうまされ

とも記れず侍るにや為勝

十六番

左勝

宗隆朝臣

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

年ごろ思ひわたりつるをりしもあるを見ゐ
十六 右 資實
わが恋はよるの袂のまろ寝にも涙の露ぞ
先立ちにけるうつつにも夢にも人を見てしより
そめくいかなる色ぞ
乃ちつたなくもいふべきやうのあらばこそ
のみ宮やこの外の面くこそ侍るもや
勝とこの外
十七番
左持 為重季

つもるさもけのこやいとゞ物思ふ年も歌をぞ
右 隆親
思ひそめ君を恋ふる心ゆくへ知らずも
あるかな恋たゆとも
とせをさ寝ても
ねてもさめても
十八番
左 保季
七夕の松浪ぬれて立てる年八百年をへてるとも
右 實宣

つもるさへ思ひも知ていく年の我老の身の杉ん

右歌末の松心の浪小まくも松ありて

いそぐ心安からし

なかるらん老まつおよせるく作もん當来の松山ま

ちてや小

十九番

左勝　長後

老しらぬ心も知て年ふるもやたん

右　持豫

おもひ入心もいくほとの勝負を記す右うち

なかめ暮すとの事をくやた

左歌の年へぬるみをもて老の鶴乃杖いつさくら

右猶

二十番

左　重政

おはこの勝や

右　光行

歌の門の幸へぬるみをもて老の鶴乃杖つまる

左歌老乃鶴の杖つまるまで

情やはらむ右歌調入ともや筆のたつ
ともいふべくも侍る以右勝とす

九一番

左勝　性照

清きなかれにさそ長夜なくて心たくらん人おとろく
右　見佛

つまとそや思ひおもふと待わひよ心のやみの先と学に学ん
右名乃久しき心いとも優すた借をたき
長夜なくらんあるふ人おとろくや

右の番も菊の秋まさるへし

九二番

左　権別當法印

右勝　隆信朝臣

春ふれて磯ちとり海へたつ鳴ねも浪の花も暖くそうらふ
二葉より常盤の松をたのみてそ千年をかけて思ふ

右疑ふくは松ふるまてとも侍るへし若為勝

九三番

皇太后宮大夫入道

ぬりにくうらはるゝ浪路をよそ〳〵に渡る小舟もよそ〳〵ながら

右　　女納言法仰

きえとまる露にも袖はぬれにけり浪間よりみゆる

右歌いまひとしほ〳〵こゝろ細くなりぬ

〳〵浪のたゝずまひきえ〳〵くなり行あはれ

もろ〳〵の家は筆集小もの寄せもやみも

多く久しくこゝに書て侍と郢曲なるふうちもふ所

第二番

てつまひさうしをふうるにて多給るこゝ

ぬまの家なるに出て久〳〵とかく過さむ程さ

きてそ正統ふなるべき寸但し多ひさ記久〳〵

くあのつく杯しうせよきんあきたて本やなと

乃ひさうしをもつ〳〵浪あを育のなつ一流

さはさそこちよめるなるべく〳〵又多筆集

ふを校といふて久しとなるしかいるとも

きこなるべく〳〵右歌心つるに筆いるあと

ひてあふのまつ系そよまつあいと宮〳〵

くすゝめまた右歌いと筆それくしてても

みく侍まて筆小割着よせて承判矣

先非定、仰着乃群義ふうべく

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

127
267
1

国立国会図書館　　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用